

VI. D 冥界

冥界の念入りな描写 = 『オデュッセイア』 11 巻(と 24 巻)、アリストパネスの『蛙』、
ウェルギリウスの『アエネイス』 6 巻、プラトンの『国家』 10 巻
どこにあるのか？ 使者はどうしているのか？

(1) ありか

下方 —— 『オデュッセイア』 10. 174、『イリアス』 6. 19 など（「下る」「地下」など）

西方 —— 『オデュッセイア』 24：太陽の門を超えたところ

無(?) —— プラトン『ソクラテスの弁明』

水域の向こう側(?)

(2) 境界

オケアノス(海流)

アケロン(川) —— カロンという渡し守にオボロス銭を支払う (Aristoph. 『蛙』)

ステュクス(川) —— 神々の誓いにも用いられる水の流れる特別に神聖な川 (Pl. 『国家』, Ap. 177)

レーテー —— 水流か、野原か、館か椅子か

☆境界越えを儀礼で代用できる？ (『オデュッセイア』 11 巻)

(3) 死者の意識

活力・意識なき亡者たち (Odys. 11 ほか) → 血を飲むまで母が息子のこともわからない。

しかし、一旦意識を取り戻すと、かつて
生きていた時の個性や表情を持ち続けている。
あるいは、冥界にいる者どうしは普通に対話している。

コウモリのごときもの (Odys. 24) → チチ、チチと啼き声をあげて群れながら進む。

杖でヘルメスによって追い立てられる。

眠り → 「全てを眠らせるハデスが私をアケロンの岸边へ連れてゆく」 (Soph. 『アンティゴネ』 810)

忘却 → 「忘却と沈黙は死者たちの特権である」 (『ギリシア詩華集』 8. 236)

(cf. Apollod. 177 末 3 - 178 ペイクトオスの椅子)

続く知覚(?) → 眼が見えたら、私はハデスへ行ってどのような目で父を見、惨めな母を見れば
よいかわからぬではないか (Soph. 『オイディプス王』 1371-73)

(4) 責苦と至福？

ミノス王と弟ラダマンテウスが裁判官を務める (Apollod. 120. 8-10)

刑罰 —— cf. Bulf. 246 末 6 - 247. 8

浄福 —— エリュシオン (Apollod. 202. 9)

「浄福者の島々」……カドモス、ペレウス、アキレウスなど

どちらでもない —— Odys. 9 巻の大半の死者

- ・まとまったイメージはほとんど作ることができない
- ・生者と死者を隔てる境界 —— 空間的なものと知覚的なものと。交換可能(!?)
- ・空間的な隔たりは水流による